

# 学位論文要旨

明治後期の幼稚園におけるフレーベル主義を

めぐる保育実践の変容に関する研究

-京阪地域および広島女学校附属幼稚園を中心として-

金子嘉秀

広島大学大学院教育学研究科

2013年

## 【論文題目】

明治後期の幼稚園におけるフレーベル主義をめぐる保育実践の変容に関する研究  
-京阪地域および広島女学校附属幼稚園を中心として-

## 【章構成】

序章 . 本研究の目的と方法	4
第1節 研究の目的	5
第2節 先行研究の検討と本研究の方法	6
<b>第1章. 明治期のフレーベル主義幼稚園に関する研究上の知見と課題</b>	<b>15</b>
第1節 フレーベル主義とは何か	16
第2節 地方幼児教育史の課題と地方幼稚園に関するこれまでの知見	25
(1) 先行研究において指摘された幼児教育史の課題	25
(2) 明治期の「中央」と「地方」の幼稚園に関する知見と課題	26
<b>第2章. 京阪地域における幼稚園研究の進展と保育実践の変容</b>	<b>37</b>
第1節 明治期の京阪地域の幼稚園沿革とその全国に占める位置	38
第2節 京阪神連合保育会における恩物をめぐる議論の展開	42
(1) 京阪神連合保育会の結成と会誌発刊の経緯について	42
(2) 恩物をめぐる議論における観点	43
(3) 恩物の用語法や手技の変化とフレーベル主義性の希釈	45
第3節 京阪地域における海外の幼稚園情報の収集と利用	49
(1) 背景と分析対象	49
(2) 「最も立派な幼稚園のある」アメリカ合衆国の幼稚園情報	49
(3) ヨーロッパの幼児教育制度に関する情報の特徴	53
(4) 海外の幼稚園情報の国別の比重について	53
第4節 京阪地域における幼稚園の効果研究ならびに児童研究の萌芽	55
(1) 卒園児と非卒園児の小学校における成績調査実施の経緯	55
(2) 「手技の好悪」調査実施の経緯	60
(3) 両調査の意義とその後の京阪地域における研究活動について	62
第5節 大阪市視学楠品次を通じた広島女学校附属幼稚園への着目	63
(1) 本節の目的と楠品次の経歴	63
(2) 楠品次の保育会における演説内容にみられる幼稚園保育観	63
(3) 楠品次を通じた大阪市役所と広島女学校関係者の参照・交流関係	65
(4) 広島女学校附属幼稚園への着目の意義	67
第6節 京都市における幼稚園のカリキュラムと保育実践の変容	69
(1) 明治期の京都の幼稚園概観	69
(2) 京都市城巽幼稚園の保育案にみられる保育評価	71

(3) 京都市日彰幼稚園の規則にみられる保育内容の変容	79
第7節 大阪市の幼稚園における実践にみられる保育方法の変容	85
(1) 明治期の大阪の幼稚園概観	85
(2) 大阪市愛珠幼稚園の保育案にみられる保育内容の変容	87
<b>第3章. 明治後期の広島女学校附属幼稚園における保育実践</b>	
<b>-中心統合主義カリキュラムの導入-</b>	<b>102</b>
第1節 広島女学校附属幼稚園の沿革	103
(1) 広島女学校と主要人物	103
(2) 広島女学校附属幼稚園について	105
(3) 広島女学校附属幼稚園師範科について	109
第2節 アメリカ合衆国幼稚園教師時代の M.M.クックの幼稚園観の分析	112
(1) M.M.クックの略歴と対象史料	112
(2) ノート No.01(1899-1901)の保育案にみられる M.M.クックの保育観	112
第3節 日本における中心統合主義カリキュラムの受容 - 宮崎カメの保育案より -	119
(1) 宮崎カメの保育案(1904)にみられる保育内容の構成方法	119
(2) 中心統合法とはなにか	123
第4節 週案展開方法の多彩化と恩物の便宜的な利用 - 松下トクの保育実践から -	126
(1) 松下トクの略歴	126
(2) 松下トクの保育案(1906-1908)にみられる保育内容の構成方法	124
(3) 週案展開方法の多彩化と恩物の便宜的な利用	130
第5節 「地方」の実情に即したカリキュラムの変容	135
第6節 製作や作画方法の選択上の工夫にみられる配慮	137
第7節 保育案の比較を通じた保育内容の構成方法の検討	140
<b>第4章. 明治後期の「地方」における幼稚園研究と保育実践についての考察</b>	<b>145</b>
第1節 本論文の知見と総合考察	146
(1) 地方におけるフレーベル恩物の権威性や教義性の希釈	146
(2) 京阪地域における幼稚園に関する情報源の多様化と実践への利用	146
(3) 広島女学校附属幼稚園における実践と幼稚園関係者への影響	147
第2節 本論文の課題と今後の研究の展望	150
引用参考文献	152
史料一覧	162
巻末史料	166

## 序章. 本研究の目的と方法

### 第1節 研究の目的

本研究では、京阪地域、特に大阪市と京都市の幼稚園、および広島女学校附属幼稚園に着目し、フレーベル主義幼稚園の受容から十数年が経過し、これらの地域・幼稚園ではフレーベル主義的な保育内容がどのように受容され、また独自の保育実践がどのように形成・変容していったかを明らかにすることを目的とする。

幼稚園は、1840年にF.W.A.フレーベル(Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852)により考案された“kindergarten”を起源とする近代的な幼児教育施設・制度であり、我が国では1876(明治9)年の東京女子師範学校附属幼稚園の開園がその嚆矢とされる。

従来から幼児教育史の分野では、思想史・制度史・施設史などに重きがおかれ、保育内容・保育方法・カリキュラムなどの分析を通して過去の保育実践に接近を試みる歴史的研究が少ないこと(宍戸1988)、明治前期においてすら東京女子師範学校附属幼稚園の実態解明に偏重していること(湯川1994)、また実践史や保育者養成に関する研究や保育者や親の幼児教育意識を含めた幼稚園観の研究が未開拓であること(湯川2007)などの課題が指摘されてきた。また検討の比較的容易な公刊された著作物上に、明治後期の地方の幼稚園が十分にとりあげられてこなかったこともあり、明治後期の地方の保育実践は長らく分析対象として俎上にのぼらなかつた。そして明治後期の地方の幼稚園についても、明治前期の幼稚園に関する知見、すなわち東京女子師範学校附属幼稚園とその後続の幼稚園という関係図式の延長線上にあるものとして描かれることが多かった。

そこで本論文では早くから保育会を擁し、幼稚園保育の盛んであった京阪地域の幼稚園、およびアメリカの進歩派の潮流をいち早く日本にとりいれたとされている広島女学校附属幼稚園に着目する。そして、当時の保姆の手による保育案や園誌、保育会の雑誌など、保育実践に関する記述を多く含むと考えられる非公刊史料も分析の対象とし、公刊著作物には表れない地方の幼稚園関係者の幼稚園に関する問題意識や、今日では歴史の中で立ち消えていった明治後期の地方の幼稚園における独自の保育実践内容を明らかにしてゆく。具体的には、明治10年代の幼稚園導入初期の恩物利用と比べて明治後期の京阪地域では利用方法がどのように変容していったか、また明治30年代の広島女学校附属幼稚園の保育実践にはどのような特徴があり、それを京阪地域の幼稚園関係者がどのような経緯から参照したかという観点から、対象史料を詳細に分析する。これにより、明治後期の幼稚園の実態がより正確に理解・把握されるのみならず、当時の規則である「幼稚園保育及設備規定」や「小学校令」にとらわれない議論や実践を詳細に分析することによって、今日の保育にも示唆を与えるものと考えられる。

なお本研究では、「フレーベル主義」の中心的人物と目されていたS.ブロー(1908)による幼稚園方法論、および前述のような明治時代の「フレーベル主義幼稚園」への問題意識、批判内容を踏まえ、「フレーベル主義」について以下のように定義する。「フレーベル主義」とは1) フレーベルの汎神論的な世界観を背景とした「球体法則」「生の合一」「部分的全体」といった世界の成り立ちの規則性・法則性を前提として受け入れ、2) 「恩物」をその法則を子どもに認識させるための道具と捉え、3) 問答法・一斉教授による保育を行う方法論を指すものである<sup>注1)</sup>。

## 第2節 先行研究の検討と本研究の方法

第2章で検討する京都市、大阪市の公立幼稚園保姆らにより構成された保育会の雑誌『京阪神連合保育会雑誌』に着目し、その内容分析を行った研究は、水野(1980a,1980b)による当雑誌の特徴と内容変遷を概観したものをはじめ、金子眞知子(1993)、田中(1998)、秋山(2007)、森岡(2009)、金子嘉秀(2011)などの多くの研究が蓄積されている。これらの文献において金子眞知子は教育制度の変容、田中まさ子は表現方法という保育内容論、秋山はジェンダー的視点からの言説の分析、森岡が幼小連携の言説分析、そして金子嘉秀は海外の幼稚園情報の把握状況という視点から、それぞれ検討を加えた。しかし、これらの諸検討は「現場保育の実情を知るにはまことに好都合のもの」<sup>注2)</sup>という本誌の特徴を活かしながらも、幼稚園におけるフレール主義の受容と変容という明治後期の中心的課題に関する分析の余地を残している。

次に京都市の各幼稚園の園誌・保育案に着目し分析を行った先行研究には齊藤・丸田・棚橋(2003)、棚橋・斎藤・丸田(2003)、および清原(2006,2007)がある。齊藤・丸田・棚橋(2003)および棚橋・斎藤・丸田(2003)は、小川・日彰・柳池・城巽・中立の各幼稚園の現存史料をリスト化し、その内容を概観した点に貢献があった。また清原(2006)は京都市城巽幼稚園、清原(2007)は京都市柳池幼稚園の保育案を対象とし、記述された手技の多寡を数えあげ、その変化を検討した。また大阪市の幼稚園についても、特に「伝統と史料に富む」<sup>注3)</sup>と評価のある愛珠幼稚園に関する知見の蓄積は多く、福原(2007)、西小路(2011)、小山(2012)らによって愛珠幼稚園は幼稚園規則内容の変化から、建築の変遷、出席把握方法の工夫に至るまで、多くの研究が蓄積されている。これらの研究は当時の保育実践の解明を試みたものであり、特に西小路(2011)は「随意」「自由」と記された保育案日案の多さから子どもに寄り添う保育の黎明が見られたと指摘した。ただし保育案に設けられた事後的な記入欄である「成績」「日誌」欄の具体的な記述内容については、十分に解明されていなかった。

第3章でとりあげる広島女学校附属幼稚園に関する先行研究としては田中(1998)、橋川(2003)、柿岡(2005)らのものが挙げられる。田中(1998)は、「子供の興味」をキーワードとして大正期の本幼稚園の保育内容を中心に検討した。また橋川(2003)、柿岡(2005)の研究は、本幼稚園の保育実践を明治後期の保育実践の新しい展開の一例として、『聖和保育史』(1985)に掲載された二次資料<sup>注4)</sup>を用いて、日々の保育が相互に関連していたことに言及した。橋川(2003)の本幼稚園の断片的な史料を用いた中心統合主義的方法を使用していたという指摘は意義のあるものであった。ただし、柿岡(2005)による言及は『聖和保育史』内で指摘された分析を超えるものではなかった。

そこで本研究では公刊された著作物に加えて、広島女学校および京都市、大阪市の保育案・日誌など保育実践に関する記述を多分に含む非公刊の史料も渉猟し、現存するものは収集の上、分析の対象とした。そして府県史や市史などの地方史に見られる記述や、対象の幼稚園を附設していた小学校の沿革誌なども補強的な史料として用いつつ、明治後期における地方の幼稚園における保育実践内容の変容を明らかにする。

## 第1章. 明治期のフレーベル主義幼稚園に関する研究上の知見と課題

明治前期の幼稚園は東京女子師範学校附属幼稚園の「後続幼稚園」<sup>注5)</sup>と形容されるような、規則・保育内容を同園に倣った幼稚園が全国に数十園あるにとどまっていた。

明治後期という幼稚園が爆発的に増加した時期における東京女子師範学校附属幼稚園の実践を知りうる非公刊史料の多くは関東大震災で焼失し<sup>注6)</sup>、この時期の同園の保育実践に接近することは困難となっている。このような事情から、明治後期の東京女子師範学校附属幼稚園に関する研究は、東基吉(柿岡 2005)、和田實(辛 1999, 辛 2000)の詳細な人物史研究をはじめ、彼らの保育者論の比較検討(白石 2011)などが公刊された著作物に記述された保育思想や幼稚園論の精査を通して進められてきた。

他方で京都府や大阪府の幼稚園に関する通史的文献や研究がほとんど無いなど、明治後期の地方における保育実践内容に関する知見が十分に蓄積されてこなかったことも相重なり、「公私のほとんどが東京女子高等師範学校附属幼稚園を範としており」、「恩物中心の“フレーベリアン・オルソドキシシー”(フレーベル教条主義)が一般的」<sup>注7)</sup>であったといった説明にみられるように、明治前期の指導的な「中央」とこれに追従する「地方」という図式は、明治後期にも敷衍して用いられ続けている。そして、「中央」すなわち東京女子師範学校附属幼稚園関係者の幼稚園思想・理論を分析すれば、明治後期の「地方」を含めた当時の幼稚園を説明する上で事足りるという前提に立つ研究が今日でも散見される。

## 第2章. 京阪地域における幼稚園研究の進展と保育実践の変容

### 第1節 明治期の京阪地域の幼稚園沿革とその全国に占める位置

京都市では、東京女子師範学校に附属幼稚園が開園する以前の1875(明治8)年に幼稚園類似の「幼稚遊嬉場」が設置された。また大阪では氏原銀らを保姆とするため東京女子師範学校にいち早く派遣し、日本初の町立幼稚園を開園させた。当時文部省から「特ニ旺盛ナルハ大阪府ニシテ東京府之ニ垂ク」<sup>注8)</sup>と評されたように、大阪府において幼稚園は就学前の教育制度として人気を博し、園児数という点で東京府を凌ぐ地域となった。また1906(明治39)年には、5歳児就園率が全国平均で1.4%、東京府が4.2%といった中で、京都市が5.6%、大阪府は9.3%と群を抜く存在となっていた(文部省 1979)。

加えて全国に先駆けて1889(明治22)年に京都市で保育会が設立され、1897(明治30)年に大阪市、神戸市の保育会と連合して三市連合保育会が組織された。また翌年には非売品の会員向け雑誌『京阪神連合保育会雑誌』を創刊した。このような経緯から両市は「京都市は大阪市と並んで幼稚園史上の名門である」<sup>注9)</sup>との評価のある地域であった。

### 第2節 京阪神連合保育会における恩物をめぐる議論の展開

フレーベル主義における中心的な教材であり、幼稚園批判においてその形式性や抽象性、教育効果の疑義などから批判の多かった恩物について、保育方法上どのように位置づけるかは、幼稚園観やフレーベル主義に対する立ち位置・温度差を検討する際に一つの参考指標となるものである。京阪神連合保育会では第1回大会(1897)の議題が「恩物の取捨選択」であるなど、明治30年代初頭からこのフレーベル主義の中心的教材について議論を開始していた。その後二十恩物に関する議論は、繰り返し議論されることになった。第7回大

会(1900)においては「二十恩物の内粘土細工を「パラフキン」(細工蠟)に改良するの可否」が話し合われた。この議題について同保育会では、安全性や経済性を中心に議論が展開され、二十恩物の尊重・恩物の系統的使用といったフレーベル主義の観点から取捨選択の是非が議論されてはいなかった。

また明治 40 年代になると、木の葉などについて「自然恩物」という表現が用いられたり、恩物を子どもの自由に供する実践がおこなわれるようになり、これらは地方においても東京女子師範学校と同時並行的に京阪地域においても恩物の権威主義的・フレーベル主義的な性格の希釈がおこなわれていたことを示していた。

### 第 3 節 京阪地域における海外の幼稚園情報の収集と利用

『京阪神連合保育会雑誌』は、主に京阪神の公立幼稚園保姆で構成される会員に情報を発信していた媒体であったが、アメリカ合衆国については、「フレーベルのシステムに依つてやつて居る最盛なのは亜米利加である」<sup>注10)</sup>などと評価され、制度・統計・研究大会などの情報が最も多く掲載されていた。岡田(1963)により、明治 10 年代前半の幼稚園関連文献の検討から、アメリカ合衆国由来の幼稚園知識がもっとも多く輸入されていたことが指摘されている。本節の分析からは、明治 30 年代以降の京阪地域においてもアメリカ合衆国の幼稚園に関する情報が、特に充実していたことが明らかとなった。

加えて、幼稚園制度のあったアメリカ合衆国・ドイツ以外に、フランス・英国などの異なる形態の幼児教育制度についても、その淵源や現在の制度、その保育方法や園数・在籍幼児数など、基礎的な特徴を捉えた情報を知り得る内容となっていた。

そしてこれらの様々なチャンネルから入手した海外の幼児教育制度に関する情報は、例えば入園年齢を議論する際にアメリカ合衆国やドイツでの入園年齢や、それらの年齢に伴う困難さが参考とされる<sup>注11)</sup>など、海外よりもたらされた保育実践に関する情報が保姆らの議論や判断の前提や根拠として用いられていた。

### 第 4 節 京阪地域における幼稚園の効果研究ならびに児童研究の萌芽

本節で検討する幼稚園卒園児の小学校以降の成績に関する調査および手技の好悪調査は、子どもの興味などを軽視した形式主義批判、幼稚園不要論への反駁を目的としたものであり、前者は幼稚園の効果を示し、幼稚園の有用性を唱えるのに必要なものであった。また後者は幼稚園の保育内容を「子ども中心」に変えていく前提となる調査といえた。本節ではこれらの調査の経緯と内容の分析を通し、その背後にある本保育会会員の幼稚園問題に関する意識を明らかにした。

三市連合保育会において卒園児と非卒園児の成績の差を通して、「幼稚園の教育効果」をはかり、幼稚園の便益を世に示そうとする試みは 1903(明治 36)年、幼稚園卒園児はかえって成績が不良であるとの言説などに対抗するため、会員より提案があったことに始まる。その後直ちに調査方法を取り調べるための委員会が設置されたが実施は延期され、調査結果は 1909(明治 42)年 12 月発行の第 24 号に掲載されることになった。これは東京女子師範学校関係者の保育研究・啓蒙団体において同様の「幼稚園出身児の成績に関する調査に就て」の結果が掲載されたのが 1909 年 10 月号と 11 月号であったから、東京女子師範学

校とほぼ同時進行で行われた調査であるといえた。また第2節でみたような恩物議論の進展とともに、子ども自身の目線から見た「手技の好悪」も問題とされ、1908(明治41)年に京阪神の三市で一斉に調査されるようになった。この調査は子どもの視点から教授内容を検討したものであり、「子ども中心主義」的な視点や児童研究の、地方における萌芽をみることができた。

### 第5節 大阪市視学楠品次を通じた広島女学校附属幼稚園への着目

本節では、広島女学校附属幼稚園に早くから注目していた大阪市視学楠品次(1870-没年不明)による広島女学校附属幼稚園への着目経緯の解明を通じ、影響関係の存否のみならず、どのような影響・参照関係があったかという過程も含め、検討を行った。楠は1909(明治42)年に大阪市視学として大阪市保育会に登壇して三度目となる演説を行い、長崎の活水女学校附属幼稚園、神戸の頌栄幼稚園などのフレーベル主義色の強い幼稚園と比較しながら、広島女学校附属幼稚園についてはその色彩が薄く、現在のアメリカ合衆国の幼稚園保育方法の潮流が採り入れられていると評価していた。

この演説以降の楠の足跡は「大阪市役所からの依頼状」<sup>注12)</sup>、および「楠品次の礼状」<sup>注13)</sup>の2点の史料を用いて辿ることができる。「大阪市役所からの依頼状」の内容は大阪市役所の名義で市内の幼稚園の「保育要目」制定のために、参考となるような広島女学校の「保育要目」など規則・カリキュラムに相当するものを送ってほしいと依頼するものであり、楠による着目の背景に公的な目的も存在していたことが明らかとなった。また「楠品次の礼状」によれば上記演説直後の1909(明治42)年初夏に、楠は広島女学校附属幼稚園を訪問しており、幼稚園を参観し、保育案2冊を借りて持ち帰っていた。そして保育案を研究に用いるとともに、大阪の幼稚園関係者にも見聞した内容を教え伝えていることが記されている。このように楠品次を中心とした大阪市の幼稚園関係者は、京阪神地域内のみならず他地方の幼稚園に関する実践知識を渉猟するようになり、キリスト教ミッションという東京女子師範学校とは異なる系統の情報ソースとして、広島女学校附属幼稚園の実践に価値を見出し、この幼稚園に関する情報を収集していた経緯が明らかとなった。

### 第6節 京都市における幼稚園のカリキュラムと保育実践の変容

京都市保育会では、1898(明治31)年の『京阪神連合保育会雑誌』第1号発刊時点で、毎週の保育時間配当の研究を独自に開始しており、さらに1900(明治33)年の第4号では京都市保育会の名によって、教授に教授案があるように保育にも保育案があるべきであるというアレゴリーから、保育案の研究の必要性が説かれるようになった。これ以降保育案に関する議論は紙面上では見られないものの、京都市の参加園の保育案上では、記載内容の変化を読み取ることができる。京都市城巽幼稚園の『明治三十六年十一月 保育案 二ノ組』には、予定した科目・方法を示す「題材」「方法」欄に加えて、実際にその時間に行った結果を記述する「成績」欄が設けられるようになった。この保育案は京阪地域の現存する史料中で保育実践の反省的・事後的な評価や判断が記載されているものとしては最も古いものであった。この保育案における「成績」とは、対象園児を想定しつつ設定した課業時間内の内容や難易度が、適切であったかどうかを記録するという授業評価的な観点から

記載されたものであった。

また日彰幼稚園では、1910(明治 43)年に作成された『幼稚園保育要目草案』に、テーマ間、および各項目間の連関を重視する内容とすることが明記された。さらに大正 5 年の『教育要覧』(1917)では、恩物の一斉教授による系統的利用といったフレーベル主義的な手法よりも心理学および教育学的な知見を重視する見地から、保育内容をすべて「遊戯」と表現していた。そして恩物は技術的遊戯のうちの手工や描き方と並ぶ一つの方法という位置付けにまで縮小された。加えて、明治期の草案に見られた連続性や関係性を採り入れる試行は、1917(大正 5)年には正式な保育内容の構成原理として、同幼稚園の規則中に盛り込まれることとなった。なお幼稚園園長を兼務していた当時の日彰尋常小学校長関口秀範は広島女学校の系列幼稚園である原田村幼稚園の特徴を知り得ていた人物であり、彼を通じてその保育方法論を参照した可能性が示唆された。

## 第 7 節 大阪市の幼稚園における実践にみられる保育方法の変容

大阪市愛珠幼稚園は、1880(明治 13)年に開園した、大阪府下で大阪府立模範幼稚園に次ぐ二番目の幼稚園である。開園当初の保育内容は「本園保育法ハ概ネ東京女子師範学校附属幼稚園及ヒ大阪模範幼稚園ニ倣フ」<sup>注 14)</sup>と規則上に明記されたように、東京女子師範学校附属幼稚園および、同附属幼稚園で研修を終えて帰阪した氏原銀、木村末を擁する大阪府立模範幼稚園の保育内容を模倣した内容となっていた。しかし、東京女子師範学校以外の出身者で保姆が占められるようになったという点で東京女子師範学校からの影響がやや薄らいだ 1893(明治 26)年頃になると、保姆の間では独自の保育経験の蓄積とともに、保育内容に関する問題意識を抱くようになり<sup>注 15)</sup>、そのため刺紙や玉繫などを幼児の視力の発達を妨げるものとして廃止するなど、保育内容の取捨選択や試行錯誤を開始していた。

また明治 20 年代の同幼稚園の保育案は、予定した保育項目の箇条書き程度にとどまっていたが、1904(明治 37)年度以降の保育案では、事後的に記入する欄である「日誌」欄が設けられるようになった。これらの「日誌」欄に含まれる保姆らの保育実践に基づく「声」からは、同園では子どもの興味に合致する内容であったかどうかや重視されていたこと、子どもの興味の有無は評価基準であるだけでなく次の保育内容を選択する際も判断の材料として用いられていたことが記されていた。また恩物についてもフレーベル主義幼稚園で重視された一斉教授による「部分的全体」など規則性によって満ち溢れた世界観の伝達を企図した利用ではなく、子どもが興味を持っている遊び道具であるという理由から用いられていた。つまり恩物を中心的に利用しているという外形的な側面からの判断のみで、明治後期の幼稚園を直ちにフレーベル主義に拘泥した幼稚園と位置付けるのは誤りであり、その用い方の変容によってその程度が検討されるべきことが示唆された。

## 第 3 章. 明治後期の広島女学校附属幼稚園における保育実践

### -中心統合主義カリキュラムの導入-

#### 第 1 節 広島女学校附属幼稚園の沿革

広島女学校附属幼稚園は南メソジスト監督教会派のミッションの一環として、1892(明治 25)年に広島県広島市に開園したキリスト教系幼稚園である。これは我が国初のキリス

ト教系幼稚園開園から約 10 年後のことであった。同園は開園当初から一貫してキリスト教系保姆養成機関卒業生、およびアメリカからの教育宣教師をもって保育の任に充てており、この点において東京女子師範学校とは別の系譜・歴史的背景を持つものといえた。同幼稚園師範科は 1895(明治 28)年に設置され、2 年制による保姆養成が行われていた。この幼稚園師範科は 1908(明治 41)年時においてキリスト教園が約 40 箇所にある中で、保姆養成機関を設置していた 4 園の一つに数えられ、呉、宇和島、別府、神戸などの教区内の系列幼稚園に卒業生保姆を送り出し、幼稚園保育を通じた間接的伝道活動を支えるとともに、他会派にも卒業生保姆を供給していた<sup>注 16)</sup>。また附属幼稚園は、熱心な安芸門徒の多い広島にあって当初はキリスト教への不信感の払拭に時間を要したものの、数年で入園希望者が収容可能人員を上回るほどに人気を博すようになり、1912(明治 45)年までに広島県下に 4 園が開園し、計 225 名の園児を収容するに至った。

## 第 2 節 アメリカ合衆国幼稚園教師時代の M.M.クックの幼稚園観の分析

クックは、1904(明治 37)年 2 月に来広し、以降 1938(昭和 13)年に 68 歳で定年を迎えるまで在職し、広島女学校附属幼稚園および同師範科の主任、監督(Director)など重職を歴任した宣教師である。途中 1911(明治 44)年から翌年にかけての一時帰国し、コロンビア大学においてディプロマ学位を取得した人物であった。このクックの手による保育案や日曜学校の説教の記述のある『ノート』計 8 冊が後身の聖和短期大学に保管されている。このうち『ノート』No.1 はアメリカ合衆国幼稚園教師時代の保育案が記載されており、来日前のクックの幼稚園保育観を検討しうるものとなっている。

その内容はアメリカ合衆国在住時から、クックが子どもの身近な経験に即し、また抽象的概念の具体的内容を列挙して理解促進を図るという方法論を採り入れて保育を行っていたことを示すものであった。また、フレーベル主義の中心的教材である恩物に関して、抽象的な利用を行っている日もあったが、全体としては一日の遊戯・唱歌・談話・手技間の関連、および前後の日案との連続性を考慮した統合主義的な構成方法が採り入れられていた。ただしその関連のあり方は内容の具体例の提示というやや単純な方法が多用されるにとどまっていた。

## 第 3 節 日本における中心統合主義カリキュラムの受容 - 宮崎カメの保育案より -

宮崎カメは幼稚園師範科を 1904(明治 37)年 4 月に入学、クックらの薫陶を受け、1906(明治 39)年 3 月に卒業した。その後、同じく南メソジスト監督教会派ミッションにより設置された神戸の原田村幼稚園で奉職した人物である。宮崎カメが一年級在籍時に作成した『保育案ノート』が聖和短期大学に保管されており、これは広島女学校附属幼稚園関係者が日本国内で記載した現存の知られている保育案としては最も古いものである。本史料は 1904(明治 37)年 4 月から同 12 月までの計 17 週 83 日分の週案、日案が英語で記述されている。

この宮崎カメの保育案では全 17 週に渡り、月案・週案・日案の間で相互に関連が図られており、一定の主題に沿って遊戯・唱歌・談話・手技を配置し、その関連の中で子どもの主題の理解を図る中心統合主義的な技法を用いていた。週案テーマ内容の日案レベルで

の展開方法について、やや抽象度の高い週案テーマの具体的内容を示す下位概念を列挙する手法に加えて、クックの保育案では見られなかった時間の流れを盛り込み時系列順に話題を展開する手法が多くみられるようになった。製作の模範例には日本化された内容が見られたものの、週案レベルの内容で日本固有のテーマが取り上げられてはいなかった。なお久山(1985)により、この時期の本幼稚園で恩物を用いなかった日はなかったと指摘があった。しかし本ノートでは恩物を用いず、代わりに実物や砂盤を用いるケースも散見でき、本園では1904(明治37)年時点において、恩物が毎日用いるべきものと必ずしも考えられていなかったことが示唆された。

#### 第4節 週案展開方法の多彩化と恩物の便宜的な利用 - 松下トクの保育実践から -

松下トクは、広島女学校幼稚園師範科を1906(明治39)年4月に入学、クックらの指導を受け、1908(明治41)年3月に卒業した。その後、直ちに広島女学校附属第三幼稚園において園長兼師範科助教師を勤めた人物であった。広島女学校の後身の一つである広島女学院大学に、松下トクによる『保育案ノート』全3冊が遺されており、計2学年度334日分の保育案が記載されている。なお、数日分の朝礼原稿を除き、使用された言語は英語であった。

松下トクのノートに見られる保育内容の連続化・関連化のための方法論は、宮崎カメの保育案でもみられた、下位概念の列挙や時系列的な展開に加えて、テーマが抽象的な場合は時間を遡上するように構成し、また自然科学的知識と社会科学的知識を同じ週内で並行的に教えるなど展開の方法にバリエーションが見られた。

また各々の日案における恩物の利用は、フレーベル主義において重視された「球体法則」の子どもへの伝達を意図した教義的な利用、あるいは恩物中心主義の形式主義化した目的利用よりも、むしろ繰り返しの利用に耐える経済的な教材・手段としての便宜的な利用が多かった。そして、恩物で構成することが難しい対象についても、敢えて恩物に拘泥しその形状を模倣させるといった原理主義・形式主義的な傾向は、宮崎カメのノートに比べ弱まっていった。また、「恩物作業」と銘打たれた授業時間であっても、恩物の利用を固持することなく、テーマに沿った柔軟な時間・遊具の利用がなされていたことが明らかとなった。

#### 第5節 「地方」の実情に即したカリキュラムの変容

1904(明治37)年度の宮崎カメのノートでは、日案テーマが衣類・郵便制度の場合、模範作品例においては「着物」「干マークのついたポスト」が描かれるなど、広島に在住していた園児らに理解しやすい表現となっていた。ただしこれらは、アメリカ合衆国の幼稚園由来のカリキュラム構成方法をそのまま直訳的に受容し、作品例のみを日本化したにすぎないとも捉えられる構成内容であるといえよう。

他方で1907(明治40)年度の松下トクのノートでは、このような作品例の日本化に加えて、週案テーマとして「移民の新天地での生活」や「軍隊での生活」など、「移民県」「軍事県」<sup>注17)</sup> という広島県の地域社会的・文化的特徴も採り入れられた。その内容中で、「軍事教練」「軍事演習」の恩物作業は、共に「兵隊ごっこ」的な遊戯ではあったが、両者の概

念の違いを、幼児に理解させるのは困難であったと考えられる。しかし、今日に比べて、あるいは当時の他の庁府県と比べて、当時の広島市街で生活する園児らの身近にあった社会的事象が、諸テーマとの連関の中で、取り上げられた点については、園児の生活実態に即すことが試みられたカリキュラムであるとも評価しうるものであった。

## 第6節 製作や作画方法の選択上の工夫にみられる配慮

広島女学校の後身の聖和大学の記念誌『聖和保育史』(1985)において、1905(明治38)年度の宇野ミツの保育案の絵画製作的内容は、「実際には子ども自身がどうてい作りがたいと思われる」<sup>注18)</sup>と評価された。松下トクのノートの日案の製作例でも、「稲の茎を叩いて柔らかくしている場面を描く」といったものがあり、実際に園児に取り組みさせた場合、困難を伴うものもあったと考えられる。ただし、松下トクのノート全体においてこのような日案は例外的であって、予め子どもに貼らせるものを制作する場合は、その旨が記載されていた。そして、子どもが描画するのが困難であろうテーマの場合は「あらかじめ作られた絵」を「貼る」あるいは「塗る」とされ、子どもが描画することとは明確に区別している場合が多数であった。

また「雨雲と雨」などシンプルなテーマには「描画」が用いられたが、人間や動物など特徴を表現する必要がある場合、あるいは「ガス灯・電灯・ランプ・ランタンの違い」などを区別する場合には「貼絵」が、景色など構図をあらかじめ決めてこれに色つけさせる場合は「塗り絵」が選択されている。加えて丸と縦線一本で構成された襖の絵は「描画」、廿三など漢字も使用されたカレンダーは「貼画」というように、作画法を併用した事例もみられた。

当時は、子どもの興味や発達段階を重視する「子ども中心主義」や「進歩主義」といった概念が十分に確立してはいない時代であった。しかし、これらの作画方法の使い分けからは、保姆の側に「子どもの実態」に歩み寄る姿勢があったことを、窺い知ることができると考えられる。

## 第7節 保育案の比較を通じた保育内容の構成方法の検討

本章では、クックのアメリカ合衆国での幼稚園教師時代の『ノート』、宮崎カメの『保育案ノート』、および松下トクの『保育案ノート』を用い、それぞれの執筆時期における幼稚園保育方法論、とりわけ中心統合主義的な方法の利用の仕方について検討を行った。結果、日案に関して既に先行研究で指摘のあった中心統合主義的技法の導入は、宮崎カメのノートより1904(明治37)年度まで遡ることができ、また松下トクのノートでは、1906(明治39)年4月から2学年度を通じ、週案・月案・季節案の各単位でも重視された方法論であったことが明らかとなった。

そして「対象とする子どもの生活圏・生活実態に即した保育」という視点からのテーマの日本化、作画方法の選択などの実践方法や、幼児教育関係者による本幼稚園への着目は、のちに地方幼稚園において「子ども中心主義」的な価値観が受け入れられる素地の一つとなったと考えられる。

なおクック、宮崎カメ、松下トクのノートの保育案内容を比較すると、**表1**のような共

通点と相違点があった。クックの保育案では日案間のテーマの連続性は徹底されたものではなかった。しかし宮崎カメの保育案では徹底されるようになり、また松下トクの保育案では広島市街に住む園児の知識、興味や理解の程度も考慮に入れられ、主題の展開の方法はさらにバリエーションに富んだものとなっていた。

**表 1. クック、宮崎カメ、および松下トクの保育案構成の特徴比較表**

	クックの保育案 (1899、1901)	宮崎カメの保育案 (1904)	松下トクの保育案 (1906～1908)
日案テーマの連続性	ない週もあり	有	有
恩物のフレーベル主義的 利用	有	有	無
連続化の技法	下位概念列挙 時系列展開 自然と社会の対置	下位概念列挙 時系列展開	下位概念列挙・時系列展開・時間的遡上・自然と社会の対置・登場人物による物語化

## 第4章 明治後期の「地方」における幼稚園研究と保育実践についての考察

### 第1節 本論文の知見と総合考察

本研究ではこれまで十分に光が当てられてこなかった明治後期の地方の幼稚園実践内容に迫るべく、幼稚園が最も量的な発展をみせ、保育会における研究活動が盛んであった大阪市と京都市の幼稚園、およびアメリカ合衆国の進歩派の潮流をいち早く日本に導入したと考えられる広島女学校附属幼稚園に着目した。そして、保育案・日誌など非公刊物も史料としてとりあげながら分析を行った。その結果、本研究では以下の点が明らかとなった。

1)従来の研究では、明治前期における東京女子師範学校附属幼稚園の幼稚園知識の影響や、大正期の東京女子師範学校主事・倉橋惣三の今日における思想的影響力を過大視するあまり、明治後期も含めた幼稚園の系譜を、彼らの思想や理論を中心として描きがちであった。しかし本論において京阪地域や広島女学校附属幼稚園での保育研究や保育実践内容を検討した結果、これらの地域でも東京女子師範学校附属幼稚園と同時並行、もしくはこれに先行する形で保育内容に関わる議論や、後の「子ども中心主義」の萌芽となるような保育実践上の工夫や試行がおこなわれていた。ここからは明治後期における地方幼稚園の実践は必ずしも東京女子師範学校附属幼稚園の理論や実践に追従するものではなく、保育研究・保育実践のバリエーションには拡がりが見られることが明らかとなった。

2)東京女子師範学校関係者によって統合主義保育が 1906(明治 39)年頃にアメリカ合衆国雑誌を翻訳・紹介する形で紹介されるようになった中で、広島女学校附属幼稚園ではすでに 1904(明治 37)年時点にこのようなアメリカの新しい潮流を採り入れており、さらに 1907(明治 40)年頃にはそのテーマ内容に広島の文化的・地域的特徴が盛り込まれるようになった。

3)明治後期になると京阪地域の幼稚園関係者は東京女子師範学校関係者のみならず、海外情報や、広島女学校附属幼稚園での「新しい」実践に関する情報などを、独自のソース

を含む多チャンネルから能動的に収集するようになった。そしてその情報を保育に関する議論や保育内容を再考する際の比較・判断材料として用いており、保育実践にも活用していた。

明治後期において、独自の保育経験蓄積を背景に京阪地域では「中央」と並行的に研究が進められ、また広島女学校附属幼稚園のように東京女子師範学校附属幼稚園とは別の系譜を持ち、特徴的な保育実践を行っていた園もあった。そして、京阪地域では「中央」のみならず、広島女学校など「地方」の幼稚園の実践にも目を向け、幼稚園情報を渉猟するようになり、地域の実情と幼児の興味に即した保育内容となるよう工夫を重ねていたのがあった。

## 第2節 本論文の課題と今後の研究の展望

本研究では明治後期の地方の幼稚園の中でも、特にフレーベル主義的な保育の限界性を克服しようとする特徴的な実践に着目して分析を行った。しかし以下の課題が残されている。

まず、京阪地域の幼稚園、及び広島女学校附属幼稚園など幼稚園に関する研究や実践活動が盛んであった場所のみならず、他の地方におけるフレーベル主義の受容と変容の過程にせまることである。これにより、本論文で詳細を検討した幼稚園の位置付けが、内部での変容や東京女子師範との位置取りにとどまらず、より相対化され、対比的な評価が可能になると考えられる。

また、本論文で主たる対象とした保育案からは保姆らが幼児の観察を行う際の観点や、保育を評価する際の価値基準などについては分析が可能であったが、それらの背景にある問題意識については十分に汲み取ることができなかった。今後は保姆の手記や研究ノートなどの探索と収集を通じ、保育実践変容の背後にあると思われる問題意識を探ってゆきたい。

なお大正期に入ると本邦の幼稚園では、広く一般に自由主義保育、子ども中心保育といったものが受容されたといわれている。この時期に幼稚園は533園(1912年)から1066園(1926年)へと丁度倍増することになるが、「地方」と「地方」の幼稚園間の関係性という視点を導入し、その関係性にせまる事によって、より正確な関係枠組みの中で当時の幼稚園保育のあり方を捉えることが可能になると考えられる。

### (注)

- (1) 先行研究においても「フレーベル主義」に関して、明確な定義を行っているものはみあたらなかった。そこで本研究では、当時フレーベル主義の中心的な唱道者と目されていたS.ブロー(1908)の幼稚園論や、進歩派の中心人物であったG.S.ホールのフレーベル幼稚園批判内容(丸尾 1983)からフレーベル主義の特色を抽出し、理念型としての定義をおこなった。
- (2) 水野浩志(1980a)、59頁における水野の評価より。
- (3) 日本保育学会(1968)『日本幼児保育史』第1巻、141頁。
- (4) 『聖和保育史』(1985)には、「宇野(旧姓清水)ミツの授業ノート」と称される指導案の

うち、1905(明治38)年11月の月案、および11月第2週の1週間分の日案を翻訳の上タイピングしたものが、2日分の日案ノートの写真と共に掲載されている(28-33頁)。しかし原史料は2013年現在、所在が不明となっている。

- (5)「後続幼稚園」とは、山岸(2010)が明治10年代に東京女子師範学校附属幼稚園をモデルとして設立された幼稚園群を指して用いた言葉である。
- (6) 後身にあたるお茶の水大学所蔵の「明治廿八年に於ける手記」「明治二十九年に於ける保母の手記」の計2点のみの現存が知られている。
- (7) 森上史朗(2008)『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事(下)』フレーベル館、16頁。
- (8) 文部省(1889)『文部省第十七年報』、58頁より。
- (9) 『日本幼児保育史』(1968)第1巻、225頁より。
- (10) 『京阪神連合保育会雑誌』第28号(1912)、2頁。
- (11) 『京阪神連合保育会雑誌』第11号(1903)、34-35頁。
- (12) 封筒に「明治42年5月19日広島着」の消印がある。聖和短期大学キリスト教教育・保育センター所蔵。
- (13) 封筒に「明治42年11月28日広島着」の消印がある。聖和短期大学キリスト教教育・保育センター所蔵。
- (14) 1880(明治13)年5月制定の愛珠幼稚園「本園規則」第1条より。
- (15) 愛珠幼稚園の『沿革誌』(1903)、52頁。
- (16) Kindergarten Union of Japan(1908)"Kindergarten Department of the Hiroshima Girls' School, Hiroshima" *Third Annual Report of Kindergarten Union of Japan* pp.21-23. ただし、日本らいぶらりによる復刻版(1985)を利用した。
- (17) 広島県に当時第五師団や広島大本営などが置かれ、また最も多くの移民者を送り出した地域であったことを、岸田(1999)が形容した表現である。
- (18) 『聖和保育史』(1985)、34-35頁。

### (引用参考文献)

- 阿部真美子(1995)「アメリカ保育者養成史」岩崎次男編『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学出版部。pp.222-239.
- 秋山麻実(2007)「保育をめぐる「声」とジェンダー—『京阪神聯合保育会雑誌』をてがかりに—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第9巻。pp.208-216.
- 青山キヌ(1993)「近代幼児教育史研究1 日本におけるフレーベル主義保育の展開とその今日的意義」『紀要』第30巻。pp.19-31.
- 浅井幸子(2008)「明治末における保育記録の成立過程 保育者の語りにおける実践の意味に注目して」『幼児教育史研究』第3巻。pp.17-32.
- 別府愛(1988)「新教育運動と幼稚園」阿部真美子・別府愛編『アメリカの幼稚園運動』明治図書出版。pp.68-94.
- Blow,S.E.(1908) *Educational Issues in the Kindergarten*. New York: D. Appleton and Company.
- Bryan, A.E.(1890) "The Letter Killeth". *Adresses and Proceedings of the National Education Association*. Kansas: Clifford C. Baker. pp.573-581.
- 榎本常・平松三木枝(1887)『幼稚保育の手引き』細謹舎.
- Everett,E.(1905) "Kindergarten Programs". *Kindergarten Review*. Mass: Milton Bradley & Co. Springfield. pp.15-21.
- Fröbel ,F.W.A.(1878) *Mutter-Spiel und Koselieder*. Berlin : Th. Chr. Fr. Enslin.
- 藤田博子(1998)「明治初期のわが国へのフレーベル教育導入の背景：近藤真琴によるフレーベル教育の導入」『日本保育学会大会研究論文集』第51巻。pp.338-339.
- 藤原保利(1994)「アメリカにおけるフレーベル主義幼児教育思想の普及と展開に関する一考察」『教育学雑誌』第28巻。pp.60-75.
- 藤原保利(1999)「アメリカ幼稚園運動史 1856年から1923年までを中心に」『佐野国際情報短期大学研究紀要』第10巻。pp.171-186.

- 藤原保利(2005)「アメリカにおける幼稚園教師養成プログラムに関する一考察 1870年から1920年までを中心に」『佐野短期大学研究紀要』第16巻, pp.81-93.
- 藤原保利(2008)「アメリカにおけるフレーベル主義幼稚園教育の批判と多文化主義教育 1856年から1920年までを中心に」『佐野短期大学研究紀要』第19巻, pp.135-144.
- 福原昌恵(1992a)「草創期幼稚園における唱歌遊戯(2) 愛珠幼稚園における保育を中心に」『新潟大学教育学部 人文・社会科学編』第33巻第2号, pp.99-111.
- 福原昌恵(1992b)「1897年の愛珠幼稚園における保育内容 唱歌遊戯を中心として」『新潟大学教育学部 人文・社会科学編』第34巻第1号, pp.33-46.
- 福原昌恵(1993)「保姆の記録「明治二十八年に於ける手記」に見る保育活動」『新潟大学教育学部 人文・社会科学編』第35巻第1号, pp.1-10.
- 福原昌恵(1994)「明治二十八年及び二十九年の女子高等師範学校附属幼稚園保姆の記録に見る「遊嬉」の取り扱い」『新潟大学教育学部 人文・社会科学編』第35巻第2号, pp.147-155.
- 福原昌恵(1995)「1880年より1899年に至る愛珠幼稚園における保育内容の変化」『新潟大学教育学部 人文・社会科学編』第37巻第1号, pp.1-17.
- 福原昌恵(2007)「明治期大阪愛珠幼稚園における保育への幼児出席の把握促進のための方策とその意義」『保育学研究』第45巻第2号, pp.96-106.
- 船越美徳・丸尾譲(2000)「幼稚園における子どもたちの庭に関する一考察 フレーベルの庭園論を中心として」『聖和大学論集 教育学系』第28巻, pp.185-199.
- フレーベル, F.W.A. 著, ハウ, A.L. 訳(1897)『母の遊戯及育児歌』頌栄幼稚園.
- 古橋和夫(1998)「和田實の幼児教育論 - 遊戯論と遊戯分類法について -」『研究紀要. 短期大学部』第31巻, pp.105-112.
- 二見素雅子(2005)「明治時代の幼稚園教育における道德教育 修身話を中心に」『乳幼児教育学研究』第14号, pp.109-119.
- 萩吉康(1988)『三重県幼児教育史』皇學館大學出版部.
- 橋川喜美代(1988)「アメリカの幼稚園教育における子どもの自主性と教師の指導性 進歩主義幼稚園にみられる恩物教授法の改革」『上越教育大学研究紀要 第一分冊, 学校教育, 幼児教育, 障害児教育』第7巻, pp.113-125.
- 橋川喜美代(1996)「アメリカにおけるフレーベル主義幼稚園の受容と子ども観・女性観の転回」『鳴門教育大学研究紀要 教育科学編』第11巻, pp.253-264.
- 橋川喜美代(2003)『保育形態論の変遷』春風社.
- 橋本美保(2009)「明石女子師範学校附属幼稚園における保育カリキュラムの開発過程 アメリカ進歩主義の幼小連携カリキュラムの影響を中心に」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第60巻, pp.39-51.
- 林吾一(1887)『幼稚保育篇』金港堂.
- 東牧羊(1904)「大阪みやげ(つゞき)」『婦人と子ども』第4巻第10号, pp.50-60.
- 東基吉(1900)『フレーベル氏教育論』育成會.
- 東基吉(1901)「幼児保育につきて(研究)」『婦人と子ども』第1巻第2号, pp.66-71.
- 東基吉(1902)「現今の幼稚園保育法につきて」『婦人と子ども』第2巻第9号, pp.52-56.
- 東基吉(1904)『幼稚園保育法』目黒書店.
- 東基吉(1951)「婦人と子ども(幼児の教育の前身)創刊当時の子供と其頃の幼稚園の状況に就いて」『幼児の教育』第50巻第11号, pp.20-30.
- 樋口勘次郎(1899)『文部省講習会教授法講義』普及舎.
- Hilburn, Samuel M.(1936) *Gaines Sensei*. Tokyo: Kenkyusha Press.
- 平田トシ子・平田宗史・脇本光法(1992)「福岡県幼児保育史研究 - 1 - 明治期の幼稚園」『九州女子大学紀要 人文・社会科学編』第28巻, pp.113-128.
- 久木幸男(1980)「活動主義論争」久木幸男・鈴木英一・今野喜清編『日本教育論争史録』第二巻, 第一法規出版, pp.126-136.
- 久山まさ子(1985)「造形教育の歴史研究: 大正初期の一キリスト教系幼稚園での実践を通して」『教育学科研究年報』第11巻, pp.7-12.
- ハウ, A.L.(1893)『保育学初歩』福音社.
- ハウ, A.L.(1903)『保育法講義録』私立岡山県教育会.
- Hill, P.S.(1907) "Some Conservative and Progressive Phases of Kindergarten Education" *The Sixth Yearbook of the National Society for the Scientific Study of Education*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 広島女学院百年史編集委員会編(1991)『広島女学院百年史』広島女学院百年史刊行委員会.
- 広島女学校幼児教育史刊行委員会(2006)『小さき者への大きな愛 広島女学校ゲーンズ幼稚園の歴史とM.クックの貢献』広島女学院.
- 兵庫県幼稚園連合会(1959)『兵庫県幼稚園史』内匠ちえ.
- 市橋虎之助(1892)『幼稚園通覧』普及舎.
- 市橋虎之助(1902)『幼稚園の欠点』金港堂.
- 五十嵐裕子(2012)「折り紙の歴史と保育教材としての折り紙に関する一考察」『浦和論叢』第46巻, pp.45-68.
- International Kindergarten Union(1913) *The Kindergarten: Reports of the committee of the nineteen on the theory and practice of the kindergarten*. Mass: Riverside Press.
- 井上圓了(1905)「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園の事に及ぶ」『日本之小学教師』第7巻77号, pp.4-7.
- 伊藤敏行(1979)「諸学校令と教育の国家統轄」仲新・持田栄一編『学校史要説』第一法規出版.
- 岩崎次男編(1995)『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学出版部.
- 岩崎次男(1999)『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部.
- 梶浦真由美(2000)「明治・大正期の幼稚園における「折り紙」」『北海道文教短期大学研究紀要』第24巻, pp.1-10.
- 神田健次(2005)「学術資料講演会要旨 ウォルター・R・ランバスの「瀬戸内伝道圏構想」」『関西学院大学図書館報 時計台』No.75, pp.10-17.

- 篁田知義(1974)「近代Ⅱ」講座日本教育史編集委員会編『講座日本教育史』第3巻,第一法規出版.
- 柿岡玲子(2005)『明治後期幼稚園保育の展開過程-東基吉の保育論を中心に-』風間書房.
- 角野雅彦(2008)「明治後期から大正期のキリスト教主義保育とフレーベル批判」『論集』第126号, pp.25-52.
- 角野幸代(2008)「フランシス・W・パーカーの教授理論に関する研究 教育関係論的視点からみるパーカー教授論の新局面」『湊川短期大学紀要』第44巻, pp.49-58.
- 亀口まか(2010)「戦前における学齢期の保育の展開 二葉保育園の実践を中心に」『日本社会教育学会紀要』第46巻, pp.21-30.
- 上笠一郎・山崎朋子(1965)『日本の幼稚園 幼児教育の歴史』理論社.
- 金子真知子(1993)「明治後期学制改革問題と幼稚園-京阪神連合保育会の動向を中心に-」『保育学研究』第31巻, pp.78-87.
- 金子嘉秀(2011)「明治後期の京阪神地域保育会における海外の幼稚園動向の把握状況に関する考察:『京阪神聯合保育会雑誌』を手がかりとして」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 教育人間科学関連領域』第60巻, pp.259-265.
- 金子嘉秀(2013)「明治後期の幼稚園における中心統合主義カリキュラムの受容・実践内容に関する研究-広島女学校附属幼稚園師範科生徒の保育案ノートを手がかりとして-」『保育学研究』第51巻第1号 pp.6-16.
- 笠間浩幸(1998)「屋外遊具施設の発展と保育思想(2) 明治期の保育思潮と〈砂場〉」『北海道教育大学紀要 教育科学編』第49巻第1号, pp.91-103.
- 片岡彰(2006)「宮城の幼児教育の歴史と現在」『聖和学園短期大学紀要』第43巻, pp.1-8.
- 川嶋保良(1990)「明治 - 大正期・草の根有職婦人像(その2) 幼稚園保母 橋本よしぢ」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第6巻, pp.31-44.
- 基督教保育連盟編(1966)『日本キリスト教保育八十年史』基督教保育連盟.
- 岸田裕之(1999)『広島県の歴史』山川出版社.
- 北野幸子(1996)「フレーベル主義運動における「アメリカ化」議論の展開」『人間教育の探究』第8号, pp.1-18.
- 清原みさ子(1998)「日本のフレーベル受容における恩物と作業」『人間教育の探求』第11号, pp.125-131.
- 清原みさ子(1998)「日本の幼稚園の初期に影響を与えたと思われる人々に関する研究」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第46巻, pp.1-15.
- 清原みさ子(2006)「明治時代の京都市幼稚園における手技 京都市立城巽幼稚園の保育案を中心に」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第55巻, pp.33-50.
- 清原みさ子(2007)「明治時代の京都市幼稚園における手技 京都市立柳池幼稚園の保育案を中心に」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第56巻, pp.53-72.
- 清原みさ子(2008)「保育の記録にみられる手技 明治30年代後半から大正時代にかけて」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第57巻, pp.59-80.
- 小針誠(2005)「戦前期における幼稚園の普及と就園率に関する基礎的研究 - 幼稚園の普及をめぐる地域間格差に注目して」『乳幼児教育学研究』第14号, pp.79-89.
- 小林二郎編(1884)『学事示諭』小林二郎.
- 小林恵子(2009)『日本の幼児保育につくした宣教師「下巻」』キリスト新聞社.
- 小久保圭一郎(2006)「明治期の日本の幼稚園教育におけるボール遊びの普及過程」『乳幼児教育学研究』第15号, pp.85-95.
- 国立教育研究所第一研究部教育史料調査室(1979)『学事諮問会と文部省示諭』.国立教育研究所.
- 小西信八(1929)「私の監事時代」『幼児の教育』第29巻第1号, pp.20-23.
- 是澤博昭(2009)『教育玩具の近代 教育対象としての子どもの誕生』世織書房.
- 小山みずえ(2009)「大正・昭和初期の幼稚園における「遊戯」研究の展開 大阪市立幼稚園を中心に」『上智大学教育学論集』第44巻, pp.85-98.
- 小山みずえ(2012)『近代日本幼稚園教育実践史の研究』学術出版社.
- 雲津英子(2012)「明治・大正期における岡山県幼稚園教育にみる子ども観」『吉備国際大学研究紀要, 人文・社会科学系』第22巻 pp.1-6.
- 倉橋惣三(1911a)「クラーク大学の児童研究事業(机辺だより)」『婦人と子ども』第11巻第1号, pp.37-39.
- 倉橋惣三(1911b)「ピー、エス、ヒル氏「幼稚園唱歌」(机辺だより)」『婦人と子ども』第11巻第2号, pp.46-47.
- 倉橋惣三(1911c)「幼稚園の改良 スタンレーホール氏(机辺だより)」『婦人と子ども』第11巻第8号, pp.29-35.
- 倉橋惣三(1912a)「モンテッソリの教育」『婦人と子ども』第12巻第4号, pp.155-164.
- 倉橋惣三(1912b)「フレーベル主義新釈 静岡県保育会第6回総会に於ける講演大要」『婦人と子ども』第12巻第6号, pp.240-246.
- 倉橋惣三(1912c)「関西行 京、阪、神三市連合保育大会」『婦人と子ども』第12巻第7号, pp.324-327.
- 倉橋惣三・新庄よし子(1934)『日本幼稚園史』東洋図書.
- 黒田成子(1979)「キリスト教保育の歴史的背景と今後の課題 フレーベル主義保育をめぐる」『研究紀要』第18巻, pp.3-18.
- 関西学院百年史編纂事業委員会(1994)『関西学院百年史 通史編Ⅰ』. 関西学院.
- 教育實成會編纂(1912)『明治聖代 教育家銘鑒』第一編.
- 教育實成會編纂(1915)『大日本現代 教育家銘鑒』第二輯.
- 京都府編(1915a)『京都府誌 上』京都府
- 京都府編(1915b)『京都府誌 下』京都府
- 京都府教育会(1940)『京都府教育史 上』京都府教育会
- 京都府内務部学務課(1913)『京都府學事例規類纂』京都府内務部学務局.
- 京都市(1975)『京都の歴史 8 古都の近代』学芸書林.
- 京都市(1985)『史料京都の歴史 9 中京区』平凡社.
- McCauley, F.C.(1905)“Work in A Japanese Kindergarten at Hiroshima” *Kindergarten Review*. Mass:

- Milton Bradley & Co. Springfield.
- 前村晃(2007)「豊田英雄と草創期の幼稚園教育に関する研究(2) 鹿児島女子師範学校附属幼稚園の設立と園の概要」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第12巻第1号. pp.11-32.
- 前村晃(2008)「豊田英雄と草創期の幼稚園教育に関する研究(6) 英雄とフレーベル主義保育の定着期の実相」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第13巻第1号. pp.75-126.
- 前村晃(2010)「豊田英雄と草創期の幼稚園教育に関する研究(7) 仙台区木町通小学校附属幼稚園の開設期の景況と史的位罫」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第15巻第1号. pp.11-32.
- 前村晃・野里房代・清水陽子・高橋清賀子(2010)『豊田英雄と草創期の幼稚園教育 日本人保姆第一号』建帛社.
- 牧野由理(2010)「幼稚園黎明期における造形教育の研究(1)」『美術教育学』第31巻. pp.343-352.
- 牧野由理(2012)「明治後期の幼稚園における図画教育: 愛珠幼稚園の保育記録と描画作品から」『美術教育学』第33巻. pp.401-410.
- 丸尾譲(1982a)「アメリカにおけるフレーベル主義の受容と展開 スーザン・E.ブローを中心として」『広島女子大学家政学部紀要』第17号. pp.133-142.
- 丸尾譲(1982b)「アメリカにおけるフレーベル主義の受容と展開 キルパトリックのフレーベル批判を中心として」『広島女子大学家政学部紀要』第18号. pp.189-198.
- 丸尾譲(1983)「アメリカにおけるフレーベル主義の受容と展開 - フレーベル主義幼稚園の克服と新生 -」『広島女子大学家政学部紀要』第19号. pp.155-163.
- 松本園子(2007)「野口幽香と二葉幼稚園(1): 先行研究の検討」『淑徳短期大学研究紀要』第46巻. pp.117-129.
- 松浦映子(2012)「北海道における明治期の幼児教育: 札幌の公立幼稚園教師「西川かめ」の生涯から」『藤女子大学紀要. 第II部』第49巻. pp.195-201.
- 南信子(1966)「北陸地方における幼稚園の歩みと展望」『幼児の教育』第65巻第7号. pp.49-55.
- 三浦義行(2005)「和田実における造形教育の理論と実践」『湊川短期大学紀要』第42巻. pp.45-52.
- 水野浩志(1977)「『保育法講義録』解説」『明治保育文献集』別巻.
- 水野浩志(1980a)「京阪神聯合保育会雑誌(1): 創刊当初の内容」『幼児の教育』第79巻第5号. pp.58-63.
- 水野浩志(1980b)「京阪神聯合保育会雑誌(2): 時代的な内容の変遷」『幼児の教育』第79巻第6号. pp.14-21.
- 文部省(1969)『幼稚園教育九十年史』ひかりのくに昭和出版.
- 文部省(1972)『学制百年史』帝国地方行政学会.
- 文部省(1979)『幼稚園教育百年史』ひかりのくに.
- 森岡伸枝(2009)「幼少連携の課題-明治・大正期の京阪神聯合保育会から-」『聖母女学院短期大学研究紀要』第38巻. pp.119-129.
- 森上史朗(1993)『子どもに生きた人・倉橋惣三 その生涯・思想・保育・教育』フレーベル館.
- 森上史朗(2008)『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事(下)』フレーベル館.
- 村山貞雄(1959)「明治三十年代の保育内容について」『幼児の教育』第59巻第9号. pp.59-61.
- 永井理恵子(1995)「明治・大正期における幼稚園の建築と教育 旭東幼稚園(岡山県)を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第35巻. pp.285-294.
- 永井理恵子(2005)『近代日本幼稚園建築史研究 教育実践を支えた園舎と地域』学文社.
- 永井理恵子(2008)「明治後期竣工の幼稚園舎二棟の建築と教育に見る地域力: 愛珠幼稚園(大阪市)と旭東幼稚園(岡山市)」『キリスト教と諸学: 論集』第23巻. pp.113-122.
- 中村五六(1893)『幼稚園摘葉』普及舎.
- 中村五六(1906)『保育法』國民教育社.
- 中村五六・和田實(1908)『幼児教育法』東京堂.
- 名須川知子(2002)「遊戯作品にみられる動きのリズムの変遷に関する研究 明治期から昭和前期まで」『保育学研究』第40巻第2号. pp.245-251.
- 名須川知子・田中享胤(2003)「明治期の幼稚園における保育時間割の研究: 京阪神地域を中心に」『兵庫教育大学研究紀要 第一分冊 学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育』第23巻. pp.49-57.
- 日本保育学会(1968)『日本幼児保育史』フレーベル館.
- 西小路勝子(2011)「子どもに寄り添う保育実践の黎明 - 大阪市立愛珠幼稚園の保育記録(明治28~40年)からの論考 -」『保育学研究』第49巻第1号. pp.6-17.
- お茶の水女子大学文教育学部附属幼稚園(1976)『年表 幼稚園百年史』国土社.
- 小田切快三(1966)『ゲーンズ先生物語』広島女学院大学.
- 小笠原道雄(1994)『フレーベルとその時代』玉川大学出版部.
- 岡田正章(1963)「明治初期の幼稚園論についての研究(1)」『人文学報』第31号. pp.69-90.
- 大阪府(1971)『大阪府教育百年史』第1巻. 大阪府教育委員会.
- 大阪市東区役所(1940)『東区史』大阪市東区役所.
- 太田素子(1982)「幼稚園論争と遊びの教育 『婦人と子ども』誌上の論争を中心に」『人間発達研究』第8巻. pp.1-8.
- 太田素子(2012)「『家』の子育てから社会の子育てへ」太田素子・浅井幸子編『保育と家庭教育の誕生 1890-1930』藤原書店.
- Parker, F.W.(1894) *Talks on Pedagogics: an outline of the theory of concentration*. New York: Chicaco. E.L.Kellogg.
- パーカー, F.W.「教育学講話」西村誠・清水貞夫訳(1976)『中心統合法の理論』世界教育学選集 83.明治図書出版.
- 斎藤寿始子・丸田まゆみ・棚橋美代子(2003)「京都市幼稚園の保育記録(1891-1950)の報告(1): 小川・日彰・柳池・城巽幼稚園の保育日誌について」『日本保育学会大会発表論文集』第56巻. pp.18-19.
- 酒井玲子(2001)「明治期におけるフレーベル教育論の考察」『北星論集』第38巻. pp.41-61.

- 坂元彦太郎(2008)『倉橋惣三・その人と思想』フレーベル館。
- 佐藤秀夫(2005)『史実の検証 教育の文化史 3』. 阿吡社.
- 澤田泰紳(2006)『日本メソジスト教会史研究』日本キリスト教団出版局。
- 聖和八十年史編集委員会(1961)『聖和八十年史』聖和女子短期大学。
- 聖和保育史刊行委員会編(1985)『聖和保育史』聖和大学。
- 關信三(1879)『幼稚園法二十遊嬉』青山堂。
- 志賀智江(1996)「明治・大正期におけるキリスト教主義保育者養成」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第4巻. pp.67-107.
- 荘司雅子(1984)『フレーベル研究』玉川大学出版部。
- 荘司泰弘(1983)「Fröbelの恩物研究 - 3 - 第一恩物の保育内容」『研究論叢 第3部 芸術・体育・教育・心理』pp.11-122.
- 荘司泰弘(1996)「日本へのフレーベル玩具伝達の誤り」『人間教育の研究』第9号. pp.129-134.
- 清水陽子(2006)「鹿児島女子師範学校附属幼稚園開設期の一考察」『保育学研究』第44巻第2号. pp.114-123.
- 清水陽子(2008)「豊田英雄と鹿児島女子師範学校附属幼稚園保育見習科に関する一考察」『乳幼児教育学研究』第17号. pp.29-38.
- 辛椿仙(1999)『和田実の「幼稚園」 幼児教育理論と実践の関係』『乳幼児教育学研究』第8号. pp.43-52.
- 辛椿仙(2000)『和田実における「幼児教育論」：その成立と展開に関する研究』白桃サービスセンター。
- 辛椿仙(2001)「和田実の「幼児教育論」について」『幼児の教育』第100巻第7号. pp.6-13.
- 新修大阪府史編纂委員会(1991)『新修 大阪府史』第5巻. 大阪府。
- 白石崇人(2010)「明治後期の保育者論- 東京女子高等師範学校附属幼稚園の理論的系譜を事例として」『鳥取短期大学研究紀要』第61巻. pp1-10.
- 宍戸健夫(1988)『日本の幼児保育 昭和保育思想史』上巻. 青木書店。
- 外山麻衣子・角幸博・小澤丈夫・石本正明(2010)「北海道における戦前期の幼稚園園舎に関する研究」『日本建築学会北海道支部研究報告』No.83. pp.549-552.
- 杉浦英樹(1996)「プロジェクト法の源流(1) コロンビア大学附属スペイヤー校の幼稚園カリキュラムと P.S. ヒル」『上越教育大学研究紀要』第16巻第1号. pp.139-159.
- 杉浦英樹(2010)「明石女子師範学校付属校園における幼小連携：「保育方針並ニ幼稚園内規」と明治期の幼稚園カリキュラム」『上越教育大学研究紀要』第29巻. pp.87-99.
- 高野勝夫(1973)『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』頌栄短期大学。
- 高野勝夫(1975)「日本の保育とエ・エル・ハウ女史」『幼児の教育』第74巻第1号. pp.22-26.
- 武部善人(1973)『明治前期産業論 産業構造発達史と連関』ミネルヴェ書房。
- 棚橋美代子・斎藤寿始子・丸田まゆみ(2003)「京都市立幼稚園の保育記録(1901-1965)の報告(2)：小川・中立・城巽幼稚園の保育日誌について」『日本保育学会大会発表論文集』第56巻. pp.20-21.
- 田中まさ子(1998)『幼児教育方法史研究』風間書房。
- 田中友恵(2002)「明治・大正期における京阪神聯合保育会による建議-保母養成機関設置および保母の資格待遇に関する改善要求を中心に-」『上智教育学研究』第16号. pp.38-50.
- 田中友恵(2003a)「明治10-20年代における見習い方式による保母養成 愛珠幼稚園の事例を中心に」『上智教育学研究』第17号. pp.34-47.
- 田中友恵(2003b)「奈良女子高等師範学校保母養成科の設置とその役割」『上智大学教育学論集』第38号. pp.57-70.
- 田中優美(2010)「桜井女学校幼稚保育科の創設と保母養成の実際 卒業生の実践を手がかりに」『幼児教育史研究』第5巻. pp.33-44.
- 田中優美(2012a)「キリスト教系女学校における附属幼稚園の教育的役割：桜井女学校を事例として」『学校教育学研究論集』第25巻. pp.1-13.
- 田中優美・橋本美保(2012b)「桜井女学校幼稚保育科卒業生吉田鉞の保育思想とその実践 室町幼稚園の保育カリキュラムに着目して」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第62巻第1号. pp.19-30.
- 谷本富(1907)『系統的新教育学綱要』六盟館。
- 豊田和子(2008)「フレーベル主義幼稚園教師養成カリキュラムの検討 幼児学校指導者との比較を通して」『高田短期大学紀要』第26巻. pp.83-98.
- 東京女子高等師範学校附属幼稚園編(1935)『系統的保育案の実際』日本幼稚園協会。
- 辻ミチ子(1977)『町組と小学校』季刊論叢日本文化8. 角川書店。
- 浦田まり子(1972)「明治期におけるフレーベル紹介」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』第33巻. pp.15-31.
- 浦田まり子(1974)「明治期におけるフレーベル教育思想の受容形態」『東京女子大学紀要論集』第27巻第1号. pp.49-68.
- 浦田まり子(1976)「明治期の幼稚園教育におけるフレーベル思想の受容」『東京女子大学紀要論集』第29巻第1号. pp.19-40.
- Vandewalker, N.C.(1908) *The kindergarten in American Education*. New York: MacMillan Company.
- 和田實(1906)「談話と手技との結合」『婦人と子ども』第6巻第2号. pp.52-54.
- 和田實(1907)「一般教育か特殊教育か」『婦人と子ども』第7巻第10号. pp.10-14.
- 和田實(1908)「幼稚園問題」『婦人と子ども』第8巻第11号. pp.6-15.
- 和田實(1909a)「幼稚園問題二つ三つ」『婦人と子ども』第9巻第7号. pp.5-12.
- 和田實(1909b)「幼稚園出身児の成績に関する調査に就て」『婦人と子ども』第9巻第10号. pp.23-30.
- 和田實(1909c)「幼稚園出身児の成績に関する調査に就て(承前)」『婦人と子ども』第9巻第11号. pp.23-30.
- 和田實(1910)「阪神地方の保育界を見る」『婦人と子ども』

も』第10巻第11号. pp.2-6.

和田實(1911)「関西の保育界を見る(承前)」『婦人と子ども』第11巻第1号. pp.7-12.

和田實(1930)「懐古」『幼児の教育』第30巻第4号. pp.38-42.

渡辺實(1977a)『近代日本海外留学生史』上巻. 講談社.

渡辺實(1977b)『近代日本海外留学生史』下巻. 講談社.

Wiebe, E. and Bradley, M. (1868) *Paradise of Childhood A Practical Guide to Kindergarten*. Mass: Milton Bradley and Company

山岸雅夫(2002)「明治10年代、20年代における幼稚園教育についての考察(II) - 特に、恩物と「数へ方」・「読み方」・「書き方」をめぐって」『新潟大学教育人間科学部紀要』第5巻第1号. pp.61-73.

山岸雅夫(2010)「明治期前半の幼稚園教育についての考察 - 「愛珠幼稚園」の幼稚園教育史上での位置づけをめぐって - 」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第2巻第2号. pp.111-120.

山岸雅夫(2012)「明治期前半の幼稚園教育についての考察(2) - 「愛珠幼稚園」の幼稚園教育史上での位置づけをめぐって - 」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第4巻第2号. pp.129-136.

山本淳子(2011)「〈自由〉をめぐる我が国の保育実践理論の変遷(2) 恩物批判から導出された自由保育への可能性」『大阪キリスト教短期大学紀要』第51巻. pp.77-85.

山下恭子(2010)「明治期及び大正期の唱歌教育について: 幼稚園における唱歌教育の位置付け」『研究紀要』第44巻. pp.61-70.

矢野日出子(2012)「幼稚園の歴史を探る」『児童教育学研究』第31巻. pp.95-109.

吉田熊次(1909)『系統的教育学』弘道館.

湯川嘉津美(1988)「明治初期におけるフレーベル理解: フレーベル伝の訳述をめぐって」『日本保育学会大会研究論文集』第41巻. pp.650-651.

湯川嘉津美(1992)「二十恩物の系譜 明治初期における恩物受容をめぐって」『香川大学教育学部研究報告第1部』第84巻. pp.191-204.

湯川嘉津美(1994)「明治初期地方における幼稚園受容の性格 大阪府立模範幼稚園の事例を中心に」『香川大学教育学部研究報告第1部』第88巻. pp.163-187

湯川嘉津美(1996)「倉橋惣三のフレーベル理解 フレーベル研究から国民幼稚園論へ」『人間教育の研究』第9号. pp.29-46.

湯川嘉津美(2001)『日本幼稚園成立史の研究』風間書房.

湯川嘉津美(2002)「小西信八の幼稚園認識」『人間教育の研究』第15号. pp.75-90.

湯川嘉津美(2007)「日本幼児教育史の研究の到達点と課題(シンポジウム記録)」『幼児教育史研究』第1巻. pp.31-36.

## (史料一覽)

### 1. 京阪神連合保育会

京阪神連合保育会『京阪神連合保育会雑誌』(但し回復刻版(1983) 臨川書店.を利用).

### 2. 京都市

竹間尋常小学校(1918)『沿革史』竹間尋常小学校.

城巽校増築会(1922)『城巽尋常小学校増築記念帖』城巽校増築会.

城巽幼稚園(1891)『明治廿四年 保育案』

城巽幼稚園(1896)『明治廿九年四月 式ノ組保育案』

城巽幼稚園(1898)『明治三十一年四月 保育案参之組』

城巽幼稚園(1902)『明治三十五年四月起 日誌』

城巽幼稚園(1903)『明治三十六年十一月 保育案 二ノ組』

城巽幼稚園(1905)『明治三十八年四月 日誌』

城巽幼稚園(1905)『明治三十八年四月 保育細目』

城巽幼稚園(1914)『大正三年度 保育案』

京都府内務部学務課(1913)『京都府学事例規類纂』京都府内務部学務課.

京都府師範学校附属幼稚園(1904)『明治三十七年篇 幼稚園保育細目』

京都市(1918)『京都小学五十年誌』京都市.

京都市銅駝尋常小学校(1918)『沿革史』京都市銅駝尋常小学校.

京都市銅駝尋常小学校(1922)『銅駝尋常小学校一覽』京都市銅駝尋常小学校.

京都市開智尋常小学校(1940)『開智』駸々堂出版.

京都市嘉楽尋常小学校(1918)『嘉楽尋常小学校五十周年記念誌』京都市嘉楽尋常小学校.

京都市教育委員会(1999)『城巽幼稚園 輝ける106年のあゆみ』京都市教育委員会.

京都市小学校創立三十年記念会(1902)『京都小学三十年史』京都市小学校創立三十年記念会.

京都市日彰尋常小学校(1915)『沿革史』京都市日彰尋常小学校.

京都市日彰尋常小学校(1916)『教育要覽』京都市日彰尋常小学校.

京都市立城巽幼稚園(1935)『園誌』京都市立城巽幼稚園.

京都市待賢尋常小学校(1918)『創立五十年記念史』京都市待賢尋常小学校.

京都市待賢尋常小学校(1921)『学事要覽』京都市待賢尋常小学校.

日彰幼稚園(1910)『明治四十三年 保育要目草案』

小川幼稚園(1901)『明治三十四年首 日誌』

小川幼稚園(1903)『明治廿六年一月興 日誌』

柳池幼稚園(1899)『明治三十二年 二之組保育案』

柳池幼稚園(1899)『明治三十二年 三之組保育案』

柳池幼稚園(1899)『明治三十三年 一ノ組保育案』

柳池幼稚園(1900)『明治三十三年 二ノ組保育案』

柳池幼稚園(1899)『明治三十四年 一ノ組保育案』

### 3. 大阪市

愛珠幼稚園(1880)『愛珠幼稚園志留辨』愛珠幼稚園.

愛珠幼稚園(1895)『保育草案 第三部』

愛珠幼稚園(1897)『保育日記 三ノ組』

愛珠幼稚園(1903)『沿革誌』愛珠幼稚園.

愛珠幼稚園(1904)『保育日記 第一ノ部』

愛珠幼稚園(1904)『保育日記 第六ノ部』

愛珠幼稚園(1905)『保育日記 第壹ノ部』

愛珠幼稚園(1905)『保育日記 第六ノ部』  
 愛珠幼稚園(1906)『保育日記 第六ノ部』  
 愛珠幼稚園(1907)『保育日記 第四ノ部』  
 福井佐一郎(1922)『学制頒布五十周年記念帖』福井佐一郎(大阪市汎愛尋常小学校)  
 伏見柳(年代不詳)『幼児保育研究実録』  
 楠品次(1908)『調書庫子への礼状』(聖和短期大学キリスト教教育・保育センター所蔵).  
 北区小学校々長会(1903)『大阪市北区教育一覽』北区小学校々長会.  
 松枝尋常小学校(1906)『大阪市松枝尋常小学校沿革誌』大阪市北区役所.  
 小倉正巳(1934)『日吉六十年誌』大阪市日吉教化委員会.  
 大阪市(1912)『大阪市例規類纂 明治四十五年六月現在』大阪市.  
 大阪市本田尋常小学校創立六十年記念誌編輯部(1935)『創立六十年記念誌』本田小学校創立六十年記念事業委員会.  
 大阪市立愛日小学校記念誌編集委員会(1972)『愛日』大阪市立愛日小学校記念誌編集委員会.  
 大阪市立愛珠幼稚園百周年記念事業委員会(1980)『愛珠幼稚園百年史』大阪市立愛珠幼稚園百周年記念事業委員会.  
 大阪市立南大江小学校(1962)『南大江九十年史』  
 大阪市役所(1908)『広島女学校附属幼稚園への依頼状』(聖和短期大学キリスト教教育・保育センター所蔵).

**4. Kindergarten Union of Japan(日本幼稚園連盟)**  
 Kindergarten Union of Japan (1907-) *Annual Report of Kindergarten Union of Japan*. (但し、日本らしいぶらりによる復刻版(1985)を利用) .

**5. 広島女学校附属幼稚園(聖和短期大学キリスト教教育・保育センター所蔵分)**

クック, M.M.『ノート』no.1(1899-1901) - no.8(1918).  
 広島女学校(1912)『私立広島女学校要覧』  
 広島女学校附属幼稚園(1914)『保育綱目』  
 広島女学校附属保姆師範科(年代不詳)『保姆師範科学籍簿』.  
 広島女学校附属保姆師範科(1909)『Announcement 1909-1910/明治四十二年三月 広島女学校附属保姆師範科略則』.  
 広島女学校附属保姆師範科(1910)『Announcement 1910-1911/明治四十三年三月 広島女学校附属保姆師範科略則』.  
 広島女学校附属幼稚園保姆師範科(1912)『保姆師範科細則』.  
 広島女学校附属幼稚園保姆師範科(1915)『保姆師範科細則』.  
 広島女学校附属幼稚園保姆師範科(1915)『Hiroshima Girl's School Kindergarten Normal Department』.  
 広島女学校附属幼稚園保姆師範科(1918)『Bulletin 1918-1919』.  
 広島女学校附属幼稚園師範科(1903)『広島女学校附属幼稚園保姆講習規則』.

広島女学校附属幼稚園師範科(1904)『Course of Study for Kindergarten Training Class』.

広島女学校附属幼稚園師範科(1906)『Announcement 1906-1907/明治三十九年三月 広島女学校附属幼稚園師範科略則』.

広島女学校附属幼稚園師範科(1907)『Announcement 1907-1908/明治四十年三月 広島女学校附属幼稚園師範科略則』.

広島女学校附属幼稚園師範科(1908)『Announcement 1908-1909/明治四十一年三月 広島女学校附属幼稚園師範科略則』.

マクドウェル, J.(1917)『保育案』

宮崎カメ(1904)『保育案ノート』

野田千代(年代不詳)『野田千代の手紙』

**6. 広島女学校附属幼稚園(広島女学院大学所蔵分)**

松下トク(1906-1908)『保育案ノート』計3冊.

Methodist Episcopal Church, South(1899-1906)

*Minute of the Japan Mission Annual Conference.*

Methodist Episcopal Church, South(1907-1921)

*Yearbook and Minute of the Japan Mission Annual Conference.*

**7. 東京女子師範学校附属幼稚園**

フレーベル会編(1901-)『婦人と子ども』フレーベル会.

神門とも他(1897)『明治廿八年に於ける手記』(手稿・お茶の水大学附属図書館所蔵) .

高田かう他(1898)『明治二十九年に於ける保姆の手記』(手稿・お茶の水大学附属図書館所蔵) .

**8. 新聞記事**

『朝日新聞』1884年3月26日付 大阪版朝刊 p.2.

『朝日新聞』1884年9月7日付 大阪版朝刊 p.3.

『朝日新聞』1885年8月20日付 大阪版朝刊 p.3.「大阪府達甲第六拾九号」.

『朝日新聞』1906年3月9日付 東京版朝刊 p.2.「教育時事 一、幼稚園の通弊」.

『朝日新聞』1906年6月27日付 東京版朝刊 p.5.「幼児保育談 浦門学人」.

『朝日新聞』1907年3月4日付 東京版朝刊 p.5.「教育時事 一、二種の幼稚園」.

**9. 文部省年報など**

広島県(1906)『明治三十六年度広島県学事年報』広島県.  
 文部省(1875-1926)『文部省年報』文部省.(ただし第17年報(1891)まで『文部省第〇〇年報』、第18年報(1892)より第24年報(1897)まで『大日本帝国文部省第〇〇年報』、第25年報(1898)より『日本帝国文部省第〇〇年報』、いずれも〇〇内は、1875(明治8)年の第1年報からの序数。)

文部省(1884)『文部省達全書 明治十七年』文部省.

大蔵省印刷局編『官報』第789号 1915(大正4)年3月23日付. 大蔵省印刷局.

大蔵省印刷局編『官報』第1397号 1917(大正6)年3月31日付. 大蔵省印刷局.